

本学教員執筆書籍の紹介

David G. Baker 編

本学寄生虫学講座・伊藤亮教授が共著者として執筆

Flynn's Parasites of Laboratory Animals SECOND EDITION

Blackwell Publishing, 2007 価格 149.99 US\$

中 谷 和 宏

Robert J. Flynn の *Parasites of Laboratory Animals* は、1973年に14名の共著者と約250名の協力者を得て、B5版ハードカバー884頁の体裁で The Iowa State University Press より刊行された。寄生虫を原虫・吸虫・条虫・線虫・昆虫と進化順に章立てし、各実験動物（哺乳類、爬虫類と鳥類、魚類）をとり上げ精緻なイラストや写真さらに分類表を付して章末に文献を引用するという構成であった。当時の我が国では各大学の医学部に共同利用の動物実験施設が配置される数年前で、大手生産会社が SPF 動物を販売し始めてはいたがマウスやラットを始めハムスター、モルモット、ウサギなどの多くが conventional 環境下で生産されており、研究者はそれらを購入し実験に供していたため種々の微生物による感染症が発生し、現在の視点からは好ましからざる状況にあった。このことは我が国の実験動物関係者にも強く認識され、田嶋嘉雄を中心に1970年に編纂された「実験動物学・総論」では微生物学的統御に多くの紙数が割かれたが、実験動物の寄生虫分野は研究者も少なく感染症の一部として取り扱われていたに過ぎない。そのような時期に発行されたこの初版は平易な英文で書かれていたことも相まって日本の多くの関係者に受け入れられた。1975年以降になって多くの大学で動物実験施設が認可され、SPF 設備が整い最新の飼育装置が導入され始めた。しかしながら、動物のクリーン化に努力を注いでいる現在でもマウスやラットのコロニーから *Syphacia* や *Aspicularis* などの線虫さえ排除するのは容易でなく、この本を手放すことができない1つの理由となっている。

このたび、34年ぶりに Louisiana State University の David G. Baker によって編集された再版が Blackwell Publishing より出版された。本書はクロス装ハードカバーのA4版813頁、重量が600 g ほど増えて2.6 kg と

なった。編者は前書きで触れていないが、巻末の目次が初版の104頁から25頁へと大幅に削減されている。寄生虫の life cycle や形態、病原性あるいは宿主病態の必要な部分を短時間で探り当てる際、目次の不足は本書の利用を低下させる要因になりはしないかと懸念される。共著者が全て交替し、33名に増員された。本書の特徴は、初版の貴重なイラストや写真の大半を残し、遺伝子分類による研究成果を他書に譲ってまで形態分類の姿勢を踏襲していることにある。また、章立ても変更された。初版の寄生虫系統順から、魚類・両生類・爬虫類・鳥類・マウスからサルまでの各動物種順へと並び替えられたのである。長いこと初版を愛用してきたものには宿主の章から目的の寄生虫を導き出す手順には多少の戸惑いを覚えるが、その代わり第1章に「寄生虫の収集、保存、診断法」、第2章から6章に渡り「原虫、吸虫、条虫、線虫、節足動物の生物学」が加えられ、読者が寄生現象を把握し易くなるよう配慮されている。この方が新しい世代の読者が入門書として使用するにはむしろ適切なのかもしれない。伊藤亮教授が第4章条虫の生物学を担当し、最新の文献を引用しながら条虫を分かりやすく提示し、旭川医科大学で行われている多包条虫の研究や重症性免疫不全マウスで *Taenia saginata*, *T. solium*, *T. asiatica* 囊虫が発育可能なことも取り上げている。最近の知見が加えられ、引用文献は総数2,478から3,049に増えた。新たに駆虫薬をテーマとした40頁もの補遺があり、現在の主な治療薬、処方、使用法、投薬量、接種ルート、効能のメカニズムなどが丁寧に説明されている。さらに用語解説も3頁に渡り追加されている。学名や動物名も現行のものに改められ、これから実験動物の寄生虫に興味を持つ職員・学生や研究者にとっても好個の本として迎えられることを期待したい。(動物実験施設)